

ベートーヴェン：弦楽三重奏曲 第2番

1798年、楽聖28歳の時の作品。(時代遅れとなりつつあった?) ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロによる三重奏というスタイルを採りながらも4楽章構成なのは、交響曲あるいは弦楽四重奏曲への足掛かりを感じさせる。第1楽章はゆったりした導入部で始まる。すぐに快活なアレグロに転じるが、第2主題で悲壮感を帯びた雄渾さを聴かせるあたりはベートーヴェンらしい。第2楽章はヴァイオリンが主導するアダージョ。アンニュイな歌が全体を包む。対照的に第3楽章は優雅なスケルツォ。中間部でわずかな翳りを見せるが、最後は軽やかに楽章を終える。第4楽章プレストでヴァイオリンが奏でる細かく速いパッセージには覇気が漲っている。強弱のコントラストをつけながら、ヴァイオリンを中心に疾走し、一気呵成にゴールする。

ショスタコーヴィチ：弦楽四重奏曲 第6番

この第6番が作曲された1956年は、フルシチョフがスターリン批判を行ない、東西に「雪どけ」がもたらされた年だった。第1楽章はソナタ形式のアレグレット。表面上は陽気に、屈託なく始まる。タタターンという三音が、ベートーヴェンの運命動機のように全体を支配する。やがてヴァイオリンが神経質にまくし立て、各楽器が不安や疑いを言い募るが、ある種の閑寂さは健在。第2楽章はロンド形式のスケルツォ。全音階的で平易な第1主題と、半音階的に典雅に揺れる中間部が対照的。パッサカリア形式の第3楽章は、荘厳な雰囲気満ちたレント。チェロが厳粛なメロディを弾き終えると、それに乗って各楽器が次々に7つの変奏を歌う。作曲家の卓越したポリフォニック技法が聴きどころ。第4楽章はロンド＝ソナタ形式。レントを引きずったまま開始され、すぐに軽快なアレグレットに転ずる。第1楽章と同様のムードが三音動機の回帰によって強められる。前楽章のパッサカリアも登場して、チェロとヴィオラがカノン聴かせる。最後は平穏に、静かに閉じられる。

ショスタコーヴィチ：弦楽四重奏曲 第5番

ショスタコーヴィチは終生、面従腹背を生きたとされる。交響曲はオモテの顔、弦楽四重奏曲はウラの顔、と言われるが、本作と同時期に作曲された交響曲は第10番。スターリンの死は、この二曲が初演された1953年のこと。オモテの顔のわりに交響曲の意図は露骨で、独裁者を揶揄する死神のダンスが登場し、フィナーレでは歓喜が爆発し、狂喜乱舞する。弦楽四重奏曲のほうは、ソナタ形式の第1楽章で「DSCH音型」がいきなり現われる。これは作曲家のイニシャルで自身の署名。重厚な諧謔性を表現した第1主題とは対照的に、第2主題は清々しいくらいおおらか。交響曲のような大きな音楽が志向されている。ヴァイオリンの高いへ音が、緩徐な第2楽章につなげる。密やかな歌が忍び込んでくると、それぞれの楽器が鬱々と歌う。主要なテーマは2つだが、ソナタ形式の展開部を欠く。ヴァイオリンの短い清澄なメロディに救われる。今度は和音の持続が終楽章へのつなぎとなる。ロンド・ソナタ形式で、第2ヴァイオリンが奏でる主題は悲痛。やがて少々居丈高なワルツが闖入すると、音楽はどんどん高揚して、狂騒状態となっていく。再現部を終えると落ち着きを取り戻し、冒頭主題を慈しむように奏

でながら終曲する。